「あゝ嬉し、屹度ェ」
「これお花や、もう他に無いかへ」
「もう一ツあるのェ」
「あるのんなら遠慮はいらん、言ひなされ」
「そんなら、妾が死んだら、お母さん、あの妾の一番好きな着物を着せて、髪も結ひ直して、おしろいもつけて、奇麗にお化粧をして、湯棺桶へ納めて、それからお金を三百兩財布へ入れて首に掛けてお呉れやすや」
「これお花や、何を言ふのぢや、昔から死んだ者にわ六文錢を持たして遣ると決つてあるのに、三百兩も何をするのんや」
「あの、地獄へ行たら閻魔さんに上げて、お父さんや、お母さんの事をお頼みして置くのェ」
「これお父さん、死んでも親達の事を思ふて呉れる……」
「それから、あの妾が死んでも燒くのん嫌ェ、燒いたら熱いで妾嫌やェ」
「めつたに燒けへん、土葬にしてあげる」
「お寺は四條の寺町、大雲寺へ」
「宜し〳〵承知した。これお花、お前何ぞ食べたい物はないか」

「欲しいものが一ツあるのェ」
「何が食べたいのんや」
「あの四條の新町の糝粉屋の新兵衛さんの糝粉餅が食べたいのェ」
「これお花や　何を言ふのや他の物なら構へんが、糝粉餅は消化が悪いで、それはお止め」
「でも糝粉餅が食べたいの、一生のお願ひ食べさして欲しいのェ」
「宜し〳〵、食べたい物なら食べさしてあげる。イヤ少し位いなら毒にもなるまい。コレ、常吉、四條の新町の糝粉屋の新兵衛さんの糝粉餅を嬢が食べたいと言ふので、お前早う行て糝粉餅を買ふといで」
「ヘェ、行て買ふて來ます……。ヘェ只今、四條の新町の糝粉屋の新兵衛さんの糝粉餅を買ひに行てあゝしんこ……」
「そら何を言ふね、これお花や、常吉が糝粉餅を買ふて來た。一つ食べるか」
「ハイ、大層お旨ふオス。お父さんモウ一つ頂戴」
「コレお花や、一つでも多ふ過ぎると思ふて居るのに、二つも食べたら毒ェ」
「そうでも、妾お旨いオスがな」
「宜し〳〵そんならモウ一つ進げます。それ」